

がんは男性の3人に2人、女性の2人に1人で発症する国民病です。一方、花粉症も多くの日本人を悩ましていて、この10年間で患者数は5割近くも増えています。

がんは全体で6割以上、早期であれば9割以上が治りますが、これに対し、花粉症は一度発症すると完治はまれで、長く付き合っているかなければならないやっかいな病気です。地球温暖化の影響で、長期的には飛散する花粉の量も増加が予想されています。

花粉症の原因の約7割がスギ花粉によるものといわれています。日本にはスギ林が多いため、その面積は全国の森林の18%を占めています。なおスギは日本特有の樹木です。

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

花粉症患者、脳腫瘍は低リスク

ぼ等しいため、ヒノキ花粉も問題となります。

花粉症に悩む方に朗報があります。こうしたアレルギー症状をもつ人では、膵臓（すいぞう）がん、大腸がん、脳腫瘍などの発症リスクが低下するという調査結果が出ています。理由は十分には解明されていませんが、アレルギー症状を持つ人はがんに対する

免疫細胞が常にごん細胞を監視し、水際で殺してくれています。ただ、ごん細胞はもと自分の細胞ですから、免疫が異物と認識できない場合があります。免疫の監視を突破して増殖し、塊をつくったものが検査で分かるような「がん病巣」です。

遺伝子の経年劣化と、免疫力の衰えが高齢者にがんが多い理由ですが、花粉症患者の過敏な免疫はごん細胞にも敏感に反応する結果、殺傷力がアップしているのかもしれない。

「免疫監視機構」が強化されている可能性があります。私たちの体内では、年齢とともに遺伝子に傷が積み重なり、毎日たくさんのごん細胞が発生しています。しかし、

もっともぼっこうがんや前立腺がんは花粉症の人にかえって多いというデータもありますから、過信は禁物です。
(東京大学病院准教授)

世界でもスギ花粉症が問題となっているのは日本くらいといえます。ただし、気候が寒冷な北海道ではスギ花粉の飛散は少ないほか、沖縄にはスギがありませんから、それら

の地域で花粉症に悩む人はごくわずかです。スギの植林が進んだ関東・東海地方にスギ花粉症の患者が多いのですが、関西ではスギとヒノキ科の植林面積がほ